

発行：株式会社リンク・インタラック
担当：事業統括部 商品開発ユニット
住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：marketing@interac.co.jp



リンク・インタラック創立50周年記念英語教育セミナーより

未来を切り拓く子どもの育成を目指し、 英語教育の可能性を探る

2022年8月1日、リンク・インタラック創立50周年を記念したオンラインセミナーを開催しました。小学校、中学校、高等学校の外国語教育の現在と課題について、現場の実践をまじえて、また英語教授法研究の立場から有識者の先生方にご登壇いただきました。その模様をダイジェストでお届けします。

第1部 ICT活用 ~子どもの心を動かすICT活用~

講師：東口貴彰先生（関西大学初等部教諭）

小学校英語とICT活用に関する著書が多数執筆され、世界に2,447人いるApple Distinguished Educatorの一人でもある東口先生。この日は「子どもの心を動かすICT活用」をテーマに、小学校外国語の授業でできるICT活用のコツを紹介しました。

関西大学初等部では中学年から週3時間の英語の授業があります。「英語は就学前や小学校低学年での経験の個人差が大きい教科。授業では経験の少ない子に合わせた授業にする」のが方針だそうです。英語の歌を歌う、音読、聞こえた英語をそのまま話す「シャドーイング」など授業中の様子だけでなく、児童が校内を英語で案内する様子や、タブレットを使いながらプレゼンテーションをする様子などが動画で紹介されました。

同校では即興的に話す力を養うため、1枚の写真を見て、何が写っているかや、その様子を書いた単語や表現を使いながらその場で説明したり、お話づくりをする活動もしています。東口先生はほぼオールイングリッシュで授業をし、児童の発話を自然に促していました。

タブレットを媒介にコミュニケーションを活性化

ICTを外国語学習に活用するなら、今までノートに書いていたことをデジタルノートに「置き換える」ような発想はすべきでないと東口先生は言います。「ICTを使わないとできない活動を取り入れ、授業の幅を広げることが大事」と、さまざまな活用法を紹介しました。例えば、旅行先の画像を背景にしたプレゼンテーション動画を作成すると、クラスの前に出て発表するよりも熱心に準備する姿が見られるといます。これは、ICT活用でアウトプットの手段が増えることによるメリットと言えます。

もう一つのICT活用のメリットとして、東口先生は「学びたいときに学べる」点を挙げます。ドキュメントやスライド等を使い、画像の共有や編集が、1人1台の端末で学校でも家庭からでも可能になるからです。授業の枠にとらわれず、またクラスを超えた学びにもつながっていくと言います。

創造性を伸ばし自然な気づきを促す

外国語活動や英語科にICTを活用するなら▼デバイスを媒介としたコミュニケーションを充実させる▼ICTが自然と子どもたちとのコミュニケーションに溶け込むような授業設計をする▼創造的なアウトプットの充実を図る—といった点がポイントになります。

単語や文法事項の習得は子どもたちの「気づき」をきっかけに自然に学ぶことができると言います。東口先生は子どもたちにタブレットを使ってフラッシュカードを作らせています。「climb」の単語に対して、どんなカードを作ったかを比べると、子どもたちが「climb」をどう理解しているかが見えてきます。中には階段をのぼる様子を「climb」としている子も。そこでALTに見てもらいます。すると「階段をのぼる」ときは、「go up the stairs」と表現し、「climb」は適切ではないと説明を聞き、単語の理解が進むといます。自分たちや友達が作ったフラッシュカードは印象に残り、定着も良好だそうです。

そのほかにGoogle翻訳のカメラ機能を使い、認識できたら正しいスペリングや文字の形になっていることに気付かせるなど、さまざまなアプリを活用した楽しい授業が紹介されました。タブレットに標準でインストールされているアプリを「提示」「共有」「発表」「記録」「通信」ツールとして授業で生かすことが、ICTを効果的に活用するポイントです。

子どもたちの好奇心をくすぐり、楽しく自然とアウトプットする授業を作り出すには、子ども自身に「なぜICTを使うのか」を考えさせ、目的意識を高めながら使わせたほうが良いそうです。

そうでないと、外国語学習の本筋から離れ、ICTを使うことに寄っていつてしまうと言います。かつての失敗談も東口先生は率直に話してくれました。これは英語に限らず、ICT活用の

本質を突く指摘と言えるでしょう。「ICTを活用することで授業の幅が広がり、子どもたちのアウトプットの手段が格段に高まります。置き換える発想ではなく、タブレットを媒介としてコミュニケーションを豊かにする授業を考えてほしい」と、締めくくりました。



東口貴彰先生

第2部 指導と評価 ～高校スピーキングテストの実践～

講師：向後秀明先生

(敬愛大学英語教育開発センター長 国際学部教授)

第2部は敬愛大学英語教育開発センター長で、国際学部教授の向後秀明先生にご登壇いただきました。今回は先生が全面執筆した『高等学校スピーキングテスト』の紹介と活用を中心にご講演いただきました。

本気度が試される今回の改訂

冒頭におさらいとして、学習指導要領改訂に伴いどのような授業改善、そして指導と評価が求められるかが解説されました。これまでの課題として向後先生は、言語活動が適切に行われていなかったり、「英語表現」で文法指導が行われるケースが散見されたことを挙げます。さらに、高校の現場では「結果を出せばいい」という現実的な対応を重視しがちで「日本社会における英語の位置づけや、児童生徒が将来、どのように英語と関わっていくかについて、認識が一致していなかった」と指摘します。

社会では、英語とICTができれば、多くの業種や職種が求める人材、地域社会に貢献する人材に近づけるし、自分の世界も広がっていく。そんな認識が広まっています。そこで英語教育の改善の方向性として▼思考、判断、表現において知識及び技能を活用する▼「話すこと」「書くこと」の言語活動をより頻繁に行う▼即興性を重視したやり取りを行う▼コミュニケーションを行う目的や場面、状況等を明確に設定した言語活動を展開する一が示されたのです。「試されるのは、これらを変えていこうという先生方の本気度」だと言います。

その第一歩として、学習指導要領の目標を各科目に割り振った「Can-doリスト」の作成は必須です。Can-doリストと教科書の各単元の対応、さらに目標、評価規準、言語活動、評価の要素を含んだ単元計画への落とし込みが求められます。講演では「英語コミュニケーションI」の単元計画のサンプルが示されました。

これらの作業は教科書選定後、夏から年度末までかけて計画的に行う必要があると言います。この流れを経ないと「いつまでも“教科書に使われる”状態から抜け出せない。一度経験すればだんだん楽になる」と向後先生は強調します。言語活動に基づく授業を創造するために「数年間は同じ教科書

を使用することも検討すべき」との提案もありました。

全学年で使えるスピーキングテストを開発

4技能5領域の総合的な学習を目指す高校英語教育の改善には、指導とともに評価の改善も求められています。特に観点別学習状況の評価は、高校では実効性が問われる大きな課題とされています。

2022年春にリンク・インタラクは向後先生が作成した『高等学校学習指導要領(平成30年告示)「外国語」対応英語スピーキングテスト事例集』をリリースしています。国立教育政策研究所の「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(令和3年8月)に準拠し高校全学年に対応した30のテスト問題パッケージです。

セミナーでは、本テストをオンラインで試行した神奈川県立海老名高校の生徒の様子が紹介されました。テスト後の生徒アンケートでは「スピーキングテストに向けて熱心に学習に取り組んだか」の問いに対して、「熱心に取り組んだ」「取り組んだ」生徒は約9割にのびりました。また、「スピーキングテストは、スピーキング能力の向上に効果があったと思うか」については、「強くそう思う」「そう思う」生徒は、全体の約8割にのびりました。

「スピーキングテストは、結果よりも生徒が次の学習に向かう動機を与えられるか」だと向後先生は言います。パフォーマンステスト実施上の留意点や、筆記テストとのすみ分けなどについても解説がありました。最後の質疑応答ではスピーキングテストに取り組む意欲のある先生方から実施や準備に関する質問が数多く寄せられました。



向後秀明先生

第3部 小中接続・評価について パフォーマンステスト(話すこと、書くこと)

講師：金森強先生(文教大学教育学部教授)

西村秀之先生(玉川大学教育学研究科准教授)

第3部では、小中学校の接続とパフォーマンステストを用いた評価について2人の先生に実践も含めてご講演いただきました。文教大学教育学部教授の金森強先生は英語教育、英語音声学がご専門です。児童期における外国語教育のあり方の研究の観点から、小学校から大学までの教材開発にも携わっています。西村秀之先生は横浜市の公立中・高校教員として勤務後、同市教育委員会主任指導主事を務めるなど校種を超えて現場に精通。現在は玉川大学教育学研究科准教授として小中高の英語指導法の研究を続けています。小中の接続が課題となる中、パフォーマンステストをどのように有効活用すればよいのか、ヒントの詰まったセッションとなりました。

パフォーマンステスト自体が楽しい学び

「これからは音声言語としての英語能力が大切になってくる。我々の時代のようにペーパーテストで終わる時代ではない」と、金森先生は英語教育の今を端的に示します。小学校で英語が教科化されたことや、大学入学共通テストでリスニングの配点が重くなったことから時代の変化は明らかです。言語活動を重視する小学校英語では「考える」「心が動く」からこそ聴きたく伝えたくなる、そんな授業が展開されつつあります。

現行の学習指導要領のもと指導と評価の一体化を図るには、4技能5領域で「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点を明確に位置づけ、授業づくり、そして評価へとつなげていく必要があります。「思考・判断・表現」を評価する中で、学習者の生きて働く「知識・技能」は垣間見えるもの。高校と同様、小学校においてもパフォーマンステストを行うことは有効と考えられるのです。

中学校においても同様です。パフォーマンステストの導入で、授業や学習者の意識は変化し、授業改善や生徒の主体的な学習意欲に結びつけることができます。「パフォーマンステスト自体が楽しく、普段の授業の延長線上にあって、結果を振り返ることが次の学びにつながっていく」。そんな授業に溶け込んだパフォーマンステストが理想だと金森先生は解説しました。

弊社は金森先生の全面監修のもと『小学校外国語パフォーマンステスト』をリリースしています。パフォーマンステストに至るまでの单元内でのどのような活動をすればいいか、またテスト後に振り返る活動のためのワークシートも準備しています。

小中の接続は、小学校英語が教科化されたことで、その円滑な橋渡しが課題になってきます。中学校に期待したいのは「文法の知識をいかに楽しく生徒に渡していくか」だと金森先生は言います。文法が分かれば英語がもっと楽しくなると感じさせる、明示的な学習活動が含まれるべきだとします。音声面を大切にする小学校は、中学校とは狙いが異なります。「連携」「一貫性」などの文言に惑わされて、中学校に合わせる「前倒し」にしてはならない、と警鐘を鳴らしました。



金森強先生

授業で育まれた力を見るテストに

第3部後半は、西村秀之先生が、弊社がリリースした『中学校パフォーマンステスト』をもとに「ライティング」の評価に関して講義を行いました。西村先生はこのパフォーマンステストの監修者でもあります。

このライティングテストのコンセプトは3つです。▼読んだこと、聴いたことについて自身の思いや考えを、読み手を意識しながら表現できるかを評価▼話題やジャンル、語彙は、学年や学期で段階的に構成▼指導と評価の一体化の視点か

ら評価規準を示したアチーブメントテストの位置づけ。

テスト問題例として、2年生の「身の回りの推しを紹介しよう」が紹介されました。これは、ビデオを視聴し情報を得たうえで、自分の身の回りの推しの紹介文を書くというもの。「聴く」から「書く」につなげるテストになります。「読む」から「書く」につなげるテストとしては1年生の「ALTからのポストカードに返事を書こう」3年生の「クラス文集を作ろう」などがあります。問題ごとの評価規準も例示しているので、指導と評価の一体化に自然と近づける形です。

パフォーマンステストを有効に学習者の意欲向上につなげるには、テストだけを単独で実施したのでは意味がありません。「授業でどういった力が育まれたのか、その達成度を見るのがパフォーマンステスト。テストに至るまでにしっかりと授業が展開されていることが前提」と西村先生は話します。金森先生と同じく、中学校と小学校では「書くこと」の目標が異なることを確認したうえで、中学校での授業例や、年間指導計画のデザインが紹介されました。「うちの生徒は書けない」と悩む先生がいるが、授業で書く時間ととっていなかったり、写させているだけのことが多い。毎時間、少しでも“考えて書く”時間ととってほしい」と、現場の悩みに引き寄せて授業改善のポイントを示しました。



西村秀之先生

セミナーを2学期の授業力アップに

セミナーに参加した先生方からは、終了後たくさんの感想が寄せられました。第1部の英語の授業でのICT活用に関しては「早速、2学期から使えそうな内容で参考になった」「中学校でもできることがあるかもしれないという気持ちになった」など、東口先生が子どもたちの表情や発話を見せながら、授業アイデアを紹介した点がたいへん好評でした。

第2部の高校スピーキングテストに関しては、実際の手法だけでなく向後先生のお話から「言語を習得するという本来の目的を意識した授業づくりに移り変わってきていることを身にしみて感じた」「『教師』の姿勢＝考え方により、授業改善の可能性は無限なものになる、と思った」など、意識面で刺激を受けた先生も多かったようです。

第3部の小中接続のパフォーマンステストに関しては「小学校と中学校の評価がどのように変わったのか詳しく教えていただいた」「何のために書くのか、改めて考えることができた。生徒が書きたいと思える環境を作り、積極性を引き出したい」などの感想がありました。パフォーマンステストの導入方法や日頃の指導の留意点などが参考になった、という意見も多数寄せられました。

2学期がスタートし、学習や行事など教育活動が年度のピークを迎えようとしています。一人でも多くの先生方が新たなチャレンジができるよう、今後もリンク・インタラックでは学校現場をサポートするセミナーを企画して参ります。ご期待ください。